

益にはねぶたが知覧の町を練り歩く。青森の子供は知覧にホームステイをするらしい。知覧の二日市でりんごを売っていたのには驚いた。「青森の人じゃっど」。建築業の射手園武也さんが教えてくれた。イテゾノと読む。知覧の家の古民家再生をしてくれたのがこの人である。塗木博人さんの紹介であった。この人は時間にはルーズであった。知覧には薩摩藩の出城があったそうである。その跡は怖い

ぐらいに寂しい。

東京に遊びに来ていた射手園さんを、我が家の食事に誘ったことがある。長男大吾も次男源紀も駆けつけてくれた。約束の時間が過ぎてても、射手園さんはなかなかやって来ない。4時間が過ぎたところに、にこにこ笑い

迷惑を掛けているらしい。人がいいから、あっちにもこっちにも約束をしてしまう。そして、にっちもさっちもいかなくなる。「あいつに言ってもしょうがない」。しかし、だれもが悪くは言わない。人柄なのである。許せないが許している。そんな

ろにくっついていた。時間の関係で昼食を抜くこともあった。由ちゃんは決して「おなかですいた」とは言わなかった。そういつつけなのかと考えたが、そうでもないらしい。わたしは義母の病室へは入らなかった。由ちゃんたちと廊下

知覧娘は我慢強い

ながらやって来た。屈託がないのである。わたしも文句を言うのを諦めた。

人間はこの世界にもいる。射手園さんには車でいろいろな土地を案内してもらった。池田湖、指宿、霧島、桜島。義母が入院をしていた指宿の病院にも連れて行ってもらった。娘の由ちゃん

で待っていた。家内は病室で話をしていた。由ちゃんは、退屈していただろうに、にこにこ笑っているだけであった。病室から義母がのぞいた。わたしを見ると満足したようにうなず

た。電話をすると「すぐにやりますから」というが2、3カ月過ぎててもやっていない。知覧でも有名ならしい。あっちこちに

由ちゃんは父親の子で、いつもいっていた。わたしは笑って会釈をしただけであった。それでよ

かった。すべては理解しあったような気がした。帰りの車の中でも由ちゃんにこにこ黙っていた。やっと、うどん屋で食事となった。由ちゃんはお父さんから分けてもらうと、少しづつ箸を付けていた。「母親似じゃっど」。射手園さんが照れくさそうに言った。

(松浦市出身)